



## “15周年記念”会員の声特集

今年の7月号(16巻4号)で、“15周年記念”会員の声を募りましたところ、多くの声が寄せられましたので、以下に学会への到着順に掲載いたしました。全国津々浦々の声に耳を傾けてください。

\*

### 1

OR学会も15周年を迎えた。編集に携わって3年目になるが、何か物足りなさ、矛盾を感じる。ORは元来現場の要求から発展してきたのに、モデル式のこね回しや、複雑な数式だけの論文が多いのはどうしたことだろう。米国でもORの成果の実施率の低いことが問題になっているが、日本でも同様で、もう少し地に足のついた、現場の雰囲気紛々たる論文がでないものだろうか。そうすれば役立つORの嘆きも聞かれなくなるだろう。

(統数研 青山博次郎)

### 2

ORという仕事は、本来、意見を事実で置き換えようとする試みだといえます。ところが、われわれ戦後のOR家は、ややもすれば論理的認識に関心が偏り、科学のもう一方の柱である実証精神に欠けるうらみがあったのではないのでしょうか。

ユーザーの側にも問題があります。憶測を排し、事実に基づいた決定をするためにORを使う代わりに、決定を事実に基づくように見せかけるためにORを利用することがありました。このようなORの使い方——これを to dress it up with science というのだそうです——が、いま、米国OR学会を揺がしているのです。

(防大応物教室 岸 尚)

### 3

企業内での諸問題が学際化の傾向にある昨今、学界では学会が増殖しすぎてはいしまいか。一般に類似学会や関連学会の多いほど、研究者には便利に違いない。さりとて、限られた市場のシェア競争から、結局は共倒れの企業の姿に、多くの学会の将来が暗示されているようにも思えてならない。いまや“学

会間”の意味での学際問題を、各学会とも真剣に考えるべき秋と思う——あくなき分裂により死をもたらすガンにかからないためにも。

(大阪府立大 加瀬滋男)

### 4

私は、日本におけるORの活用とOR学会の発展を心から願っている一人であるが、最近ORが曲がり角に来ているという噂も耳にはさむ。しかし私自身、企業内のシステムや地域社会、国家等の現状を見るに、ORが活用されるテーマは無数にあることに気がつく。たいせつなことは問題意識(目的の確認と問題形成の過程での知恵の出し方)のあり方である。

OR学会も、数学的手法の研究ばかりしているようでは、政治家や経営者からソッポを向かれるであろう。OR重役大会、OR管理者大会等の開催が私の願望である。

(三井油化 広瀬嘉道)

### 5

現在はLP, DPなども一段落した段階。かかる既成理論の整齊もさることながら、若手研究者に対してORを魅力あるものとするには、新しい理論の導入が必要と思われます。実験計画法やコーディング理論などで培われた“ガロア体上の幾何学”によるファイリング理論などの情報処理への応用が最近R. C. Bose氏などによって提案されていますが、こうした分野をORにとり入れる必要があると思います。

(早大生研 高橋啓郎)

### 6

ORは、その本質としての学際性格から、実践のための科学的思考ないし技術であり、理論学ではなくてKunstlehreたらざるをえない。それは理念の統一をなすべきものではなく、実践への意思の統一ないしは調整に力点をおくべきであろう。とくに最近では、新しい問題の発生によって新しい学問・技術の細分化的発達が著しい。学際的な専門職の集団としての学会の円満な運営のために、忌憚のない意見交換を進めたい。

(日本パルプ工業 池浦孝雄)

## 7

最近の OR 学会の研究発表も経営科学誌の発表も、いよいよ難解となり、私には理解できないものになってきました。こんな傾向のなかに、何か初歩的・基礎的な解説とか最新の動向解説というような記事もほしい。そうはいつでも、毎年春の東京学会には、なにか吸収できるかと思いつつ出席しています。勤務先の松山商大がこころよく行かせてくれることもありありがたいことです。

(松山商科大 松野五郎)

## 8

現在わが国において解決しなければならない問題は何か。国民福祉の向上、国際協調の促進など大きな問題がそこにある。OR はそのような国民が求めている問題にたち向かってこそ、その存在意義がある。そのためには、学問のための OR、企業のための OR から解放されて、国民のための OR へ脱皮する必要がある。ミクロの OR からマクロの OR に今こそ立ちかえる時ではなからうか。

(日本貿易振興会 長尾成吾)

## 9

OR に関する教育や研究をしていると、世間一般にこの技法がすでに広く浸透しているかに錯覚する。しかし、昭和 30 年以前に大学を卒業した方々が主流をなしている現在の産業界では、QC とか ZD とかの言葉がようやく認知されてきた程度で、OR は、まだ、多くの官庁、会社、工場では無縁のものと遇せられているようである。

日本の産業の基盤をささえる中小企業や地方の行政組織の中に、OR を普及させるにはどうしたらよいのだろうか。

(千葉工大 卜部舜一)

## 10. OR 学会に望む

(1) 『経営科学』を月刊にする。もし現段階でこれが不可能ならば、当面特集号を年 2 回増刊する。その内容はたとえば、春季、秋季研究発表会での特別テーマに関するものが考えられる。

(2) 他の関連学会(たとえば情報処理学会、日本工業経営学会、日本自動制御協会)等との協力関係を積極的にすすめる。

(3) 学会で専門図書、便覧等を出版する。

(広島大工学部経営工学科 平木秀作)

## 11

電信電話サービスを提供する私の職場では、複雑になってきた仕事を処理するために、経営科学が職場に普及定着することが必要です。トップの方針も

あり、数年来 OR 学会の先生方のご指導をいただいたりして、地道な普及活動をしています。こうした形で OR 学会と企業との結びつきは有意義であるとおもいます。OR 学会が今後ともこうした面にも目をむけてくださることを希望します。

(電々公社 庄司恒雄)

## 12

学会活動・会員へのサービス活動の活発化と財源問題とのジレンマは、役員・幹事諸賢の頭痛のたね、行きつく先は結局「万やむを得ず会費値上げ」となる。その対策の一助として、学会誌への広告取材を 2 年前の理事会で当時庶務担当の小生が提案、ただちに採択され、広告委員会が発足した。以来委員長に山口英治、大前義治、多田和夫、池浦孝雄の諸氏と大物を迎え歴代のご奮闘、また会員諸兄、各社のご協力のおかげで今日(9月号)までに学会の手取り 200 万円の成果を得た。この地味な縁の下の働きにも、会員各位の温かいご理解とご援助——具体的には広告取材のご紹介やご助言——を切望してやまない。

(東亜燃料 小田部齊)

## 13

企業内の身近かな問題に生かしうるよう、「誰でも手軽にやれる、みんなのための OR」をめざして、労務部教育課と共同で、パート技法の全社員教育を開始してから 2 年半になる。今では受講者が 1,000 名にもなり、火力発電所の定検や日常の業務計画などに活用されるまでになった。この幅広い底辺から、やがて、実務に根ざしたより高度の「生きた OR のアプローチ」が生まれることを願っている。

(四国電力中央計算所 佐藤洋一)

## 14

何ごとによらず、努力することがたいせつ、といわれる。OR では、何をにおいても、問題解決の努力をすることがたいせつなのであろう。

最近、勤務先で、企業の構造にも及ぶ問題が、「問題」として全体に認められて委員会が発足、何回か接衝するうちに、しだいに OR 的様相を帯び、解決が求められている。

本質的な OR を実行するために、力を合わせて問題に真剣に立ち向かい、役に立つべき機会と思われるのである。

(河北新報社 後藤義雄)

## 15

OR 入門講座を開けば必ず当たるといふ時期はとくに終わり、ダイゼスト的講義ではもう魅力はないというくらいに OR が普及したのは喜ばしい。だ

がいまでも、OR の適用はどんな組織・スタッフで、どんな部門で、どうやれば最も効果的かの実例をもっと知りたいとの希望はやはり強い。これを広く紹介するのも学会の責務の一つだろうし、またそれは OR 人口の拡大、学会の飛躍をうながすことにすぐつながるのではなからうか。

(九州大 三上 操)

16

新しい仕事をやるには、何かしら“一般的水準”とは違った才能を要求されるようですね。2 枚目では歴史を作れぬといえます。

そこでタレントの集め方が問題になるんですが、往々にして「新しいことをやるやつってのは、多少変わってる人間でなければだめなノダ」ということになり、しまいには“本物の変人”が出て来たりします。こりゃ困りますねえ、一体どこがどううまくないノダ？ 何？ や、どうも、これは失礼！

(東海大札幌校舎 浅利英吉)

17

OR 学会法人化決定のニュースは、新参者の私にも嬉しい限りでした。

北海道はいま秋たいけなわ、稔りの季節に皆さまをお迎えすべく大会の準備に大わらわです。

発表テーマは豊富多彩、新しい企画による運営を考えています。

前回から数年、オリンピックをはさんで札幌も変わりました。この機会にぜひご覧ください。北海道はこれからの地ですので、お待ちしております。

(国鉄北海道総局 村上 融)

18

「会員の声」は、今回だけで終わらせずに、今後は毎回続けていただきたい。そうなれば、OR を志すわれわれにとって、年 2 回しかない学会と異なるコミュニケーションの場ができるのではないかと思います。そしてその場で、できるだけ多くの人が、現在どのような問題で困っているか、を抽象的にもよいから発表するのです。もしそれが実現すれば、OR の発展のために非常に有意義な、また楽しい「会員の声」欄ができるのではないでしょう。 (日本アイ・ピー・エム 中 誠)

19

人々が学会に求めるものは、学界およびその周辺の新鮮な情報、およびそれに伴う学問的な刺激ではないだろうか。

地方在住のものにとって学会からの情報といえ

ば、学会誌、発表会のアブストラクトくらいである。最近の活発な本部の活動は多とするも、学会誌などももう少し版組を細かくしてもよいから、内容をより充実してもらえないだろうか。

(電々公社 庄司恒雄)

20

会誌にのる論文数が少なすぎるように思う。現在、わが国の大学、研究所等を出している紀要等は、一つの雑誌に種々雑多な論文がのっており、利用するのに非常に不便である。紀要はテクニカル・レポートの集まりと考えて、これらの中からすぐれた OR 関係の論文を OR 学会誌にのせることは考えられないであろうか。日本の OR の研究水準の現状を知ることができるような会誌にしてほしいと思う。

(南山大 飯原慶雄)

21

ASA の *The American Statistician* の“Letters to the Editor”は、時折りおもしろいことがでていて興味深いものの一つである。本欄にも OR の裏話、思いつきなどもっと気軽に投稿されるならば、一段と本誌と会員との親しみを深めていくことだろう。「会員の声」欄の発展を期待する。また、ASQC の *J. of Quality Technology* にみるような傾向の総合報告は、本誌の使命からいっても望ましく、多くの会員から歓迎されるのではなからうか。

(名古屋工大 依田 浩)

22. OR を身近なものに

OR の純理論的研究をさらに深く広く推し進めることが重要であると同様に、その実践的研究も重要なことは、車の両輪のごときである。現場マンにとっては、「そこが知りたい」的な企業内での事例記事を待望する。現場には原始的 OR の問題がどうしたらよいかわからないままに放置されている場合が多いので、「みんなの OR」運動を促進することにより、QC 運動のように OR を企業の底辺にまで定着させよう。「みんなの OR」を提唱する。

(川崎重工 村田秀雄)

23

はじめて OR の講習会に出席したとき、ちょうど OR 学会の発足時だった。OR 学会のメンバがすなわち OR マンであるとその時の先生にいわれて入会したが、それからもう 15 年経った。学会は立派に生長してきたが、企業内での生長はそれほどでない。まだ手法適用の段階であり、手法も LP とシミュレーションに限られている。ほんとうに役立つた

という実感に乏しいのは残念である。

(大同製鋼 畔柳藤男)

## 24

目下文部省で大はりきりで情報処理教育の拡充を指向している。この際今まで、OR、SE への関心の薄かった人たちにこの分野への招待を考えてもよいのではなからうか？

1) 自分たちも無縁ではないことがわかってもらえるような手ほどき程度のセミナー(5日くらい)の実施

2) 経営者に対してもこれらを受け入れやすくなるような概念の説明会(2日くらい)の実施

業者の実施している講習会は大げさで出席するのがおっくうで、しかも中味は中途半端ではなからうか？

だいたい会員数が、技術プロパーの学会にくらべて少なすぎるような感じがする。

(九州工大 堀川映二)

## 25. OR 雑誌と陀羅尼文

最近の『JORSJ』や『経営科学』をめくっていると、「OR とはいったい何であろうか」という疑問が生じてくる。どの頁にも、どの頁にも、壮麗な数式が展開されていて、まるで陀羅尼文でも眺めているようである。

陀羅尼は蒙昧な民衆を、ただひたすらに帰依させようとする時代には、大いに有力な方略であったろう。しかし、やがて密教が亡びていった理由も、また、ここにあることを思えば、われわれ OR 技術者もそろそろ反省しなければならない時代になってきたのではなからうか。

(北大工学部土木工学科 五十嵐日出夫)

## 26

OR はほんとうに広く使われているのだろうか？ 10年あまり前いっしょに OR の勉強をした連中は、それぞれ第一線の管理者となって仕事をしている。その人たちは仕事を科学的に処理しようとしているのがよくわかる。しかし、モデルの考え方は案外使われていないのではないか？ 実務ベースでモデルを考え、いかにうまく仕事を処理するかというのが、OR を地につかず第一ではなからうか。それとも自分のまわりだけが遅れているのであろうか。最近気なることを一言。(H)

## 27

OR は応用数学の分野ではなく、企業経営のなかで、たとえドロくさくてもよいから、現実に利益を

もたらすものであるべきだろう。

最近の OR 関係誌には、手法の紹介の論文が多い。手法を知らなければ問題の解決はできないが、真の目標は企業経営に役立つことである。OR マインドを持ち、意志決定、とくにシステムの選択にあたって、どの方法が最も効果的科学的に考えることのできる素質を持ちたいと思う。

(東洋工業 栗生 進)

## 28. OR の前途は洋々

今朝はとうとう A 紙がこない。配達員が休んだからとのこと。B 紙も C 紙もきちんと配達された。それにしても、いくつもの新聞がほぼ同じ時刻に、それぞれ違った人によって配達されるというのはどういうことなのだろう。配達という機能が、それぞれの新聞の重要な要素であるのかもしれないがどうも納得できない。このようなことは日常のそこそこにあるようである。(I.I.)

## 29. 研究発表をもっと親切に

春秋の研究発表会で、わかりにくい発表がたくさんあります。次のようなケースはもっと親切に、聞き手にわかりやすいように工夫できないでしょうか。

●扱った問題の説明が不十分なもの。その典型が、これは前回の続きで……とって本論にはいつてしまうもの。

- 自分の業界や分野の隠語を用いるもの。
- すでにあるものとの関連を話さないもの。
- 数式の細かい展開がいっぱいあるもの。
- 字の細かいビラやスライド。

(名古屋工大 真鍋竜太郎)

## 30

OR はその発祥に見られるように、学問上の境界領域の問題を、異なる学問分野の専門家たちがチームを組み、あらゆる道具や知恵を出し合って解決しようとする学際的アプローチを最大の特色とする。当学会は日本の OR の総本山として、公害など未解決かつ重大な問題を学際的アプローチによって解決しようとする研究プロジェクトを行なうため、主要な数多くの学問分野からこのような協同作用に関心を持つ人たちを広く集めた横断的性格の集団に方向転換することを検討してみる必要があると思うがいかなるものであろうか？(青山学院大 佃 純誠)

## 31

『経営科学』、『JORSJ』立派な論文が出されていたいへん結構であるが、少々理解でき難い論文ば

かりである。もっと理解しやすい論文も出してほしい。

研究発表会にて感じられるのは、企業等での現実の問題を扱った発表が少なくなり、現実の問題とあまり関係のないテーマで論じられる発表が多くなりつつあるのは残念である。

研究発表会のアブストラクト集は、部数の関係でコスト高だと聞かすが、会員全員に配布として会費に含ませ発表会前に会員が入手できるようにならないものだろうか……。

月例講演会が東京だけで行なわれ、地方にては行なわれないのは不公平と思う。せめて年2回ぐらいは努力してほしい。地方での年中行事として、特別講演会を年2回は計画してはどうだろうか。費用、出席者数、会場、講演者で問題があれば、他の団体と共催ということでも考えれば開けると思う。平素は会えない地方会員同志と会うこともできるだろう。また、他の団体で行なう講演会等のニュースを、地方単位で会員に通知する等も特別講演会を開く代わりになると思う。(神鋼電機 平石義則)

32

わが国最高レベルの学会誌『経営科学』は、論文の内容まではなかなかですが、わが国 OR の趨勢、傾向を知るうえには、たいへん役立っております。

会社においては、早くから OR の必要性に着目し、その普及に努めてきましたので、現在ではかなり浸透してきましたが、実務への活用は、まだ活発とは申されません。

できれば学会においても、OR 活動推進のため、もっと実務的で平易な論文の学会誌もあわせて発行していただくことを希望します。

(電々公社 川久保正人)

33

事務機械化の分野にも本格的に OR 思考や OR 技法を駆使して、経営面に迫るアプリケーションの開発が必要となりつつある。この意味から OR の必要性が感じられるし、数年来 OR 教育も実施している。しかし、なかなか着実な実践力とはならない。OR 普及浸透に対する OR 的アプローチはないものか、まずは自分の職場から始めよう。しかし、この多忙さのなかからどうしてチーム・パワーを生み出すべきか、気ばかりあせる日々ではある。

(東北電力 五十嵐豊)

34

日本 OR 学会が発足して 15 周年を迎え、しかも法人化されてますます慶ばしい限りと思うのですが、この際に学会のあり方あるいは論文誌のあり方につき、日常感じていることをのべてみたいと思います。

現在のところ、『経営科学』と『JORSJ』の2種の論文誌を発刊しているわけですが、会員の要求している論文内容となっているものが何%程あるのでしょうか? といっても、会員の種類が多岐多階層にわたっている以上、一律にこれを捉えることは困難であろうが、感じとしてはどうも理論面に偏った論文が多過ぎるような気がするわけです。もちろん、理論面の重要性を認めないわけではありませんが、OR なるものが運用に関する研究であるかぎり、実際面への応用ということを最終的な目的としているものと考えられることからすれば、この種の応用面での論文がかなり掲載されるべきだろうと思うわけです。したがって、『経営科学』のほうは、とくに論文というよりは、むしろ technical report 的な性格を持った記事ならびに啓蒙的な記事を掲載すべきではないでしょうか。さらに『JORSJ』にしても、最近投稿論文も急増しているようですが、頁数を増すことにより会員各位に対するサービスの向上につとめていただきたいと思います。

学会である以上、学会誌の充実ということは至上目標であろうかと思しますので、万難を排して特集号などの発刊をおこない、よりりっぱな、しかも何らかの形で役立つようなサービスをはかることが、いずれは学会充実の方向に進展するものと思えます。(陸上自衛隊業務学校 成久洋之)

35

1. 海外学会に参加の機会もふえ、また 1975 年日本での IFORS 大会に備え、国際学会での発表法、英語(仏語)での討論のやり方などについて、学会主催の研修会を設けてはどうでしょう。

2. IFORS は 1973 年夏以降、開発途上国の OR 発展のため、それら諸国の OR 活動の実態調査、それに基づく現地でのセミナー実施を計画しています。わが学会もこれに参加する人材を募集し、所要の訓練を施す必要があると思えます。

(防大 今村和男)